

十勝岳の火山活動に関するコメントと統一見解

昭和63年12月20日

気 象 庁

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

十勝岳では、本年10月以降地震活動が活発化し、火山性微動も観測されるようになり、気象庁及び北海道大学では監視を強めていたところ、12月16日及び18日に26年振りに噴火した。

19日21時48分頃火柱を伴う噴火をし、小規模な泥流も発生した。

この噴火後、火山性微動も起きており、引き続き火山活動が続いている。

この火山は、1926年の噴火に際し、泥流による大きな災害をおこしており、積雪期の噴火に対しては、特に警戒が必要である。

今後も、火山活動が続くと考えられるので、引き続き、厳重な警戒が必要である。

昭和63年12月25日

気 象 庁

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会会長コメント

十勝岳では、19日21時48分頃火柱を伴う噴火をし、小規模な泥流が発生し、その後も引き続き降灰が確認されていた。さらに、24日22時12分頃に噴火をし、泥流が発生した。また、25日0時49分頃から火柱をあげて噴火した。噴煙の高さは、1000mに達し、火山雷も観測され、泥流が発生した。昨日および本日の噴火は、一連の十勝岳の噴火活動の延長上にあると考えられる。

今後とも噴火と、泥流の発生の可能性があるので、厳重な警戒が必要である。

平成元年2月10日
気 象 庁

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

十勝岳は昨年12月16日の第1回の噴火以降、本日までに20回の噴火があった。気象庁では11月以降今日まで49回の臨時火山情報及び7回の火山活動情報を発表して厳重な警戒を呼びかけて来た。また12月20日、25日、29日には火山噴火予知連絡会会長のコメントを発表した。

初期の噴火は水蒸気爆発であったが、12月19日以後はマグマ水蒸気爆発が発生するようになり、12月19日の噴火では火砕サージ及び泥流が発生し、12月25日、1月16日及び2月8日の噴火では小型火砕流が流下した。その後も62-II火口から噴火活動を繰り返している。また常時500m程度、時には1000m程度に噴煙が上がっており、夜間には同火口等で時々火映が見られており、依然として活発な火山活動が続いている。

昨年9月下旬から次第に増加した地震は、現在なお高い活動状態を持続している。震源の多くはグラウンド火口域に集中しているが、旧噴火口域および西山麓にも分布している。また12月以降は頻繁に微動が観測されている。

以上のこと等から、今後も火山活動が続き、火砕流や泥流の発生の可能性があるので、観測の強化とともに厳重な警戒が必要である。

平成元年5月19日
気 象 庁

十勝岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

十勝岳は昨年12月16日より本年3月5日にかけて21回の噴火を繰り返した。噴火は小規模であったが爆発的噴火を特徴とし、火砕サージや小型火砕流を伴うこともあった。

地震、微動、火映、火山ガス等の観測資料によると、12月16日から2月8日までの期間に比べて、2月8日以後現在までの期間においては火山活動レベルの低下が認められる。しかしながら、この期間においても3月5日に小型火砕流を伴う爆発的噴火が発生した。また、4月には特殊な波形をした地震の群発が観測された。

噴出物の調査によると、今回の噴火による総噴出物量は数十万 m^3 であり1926年及び1962年の噴火に比べて数十分の一程度である。噴出物は主として既存岩石や特殊な再熔融物の碎屑物で構成されており、新しいマグマ物質は極めて少ないと考えられる。

一連の火山活動がこのまま低下を続けるか、或は次の新しい活動に引き続くかについては、なお引き続き活動の推移を監視する必要がある。